

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 058

(2023/24年度 USDA米国農務省 5月12日発表)

【ハイライト】

① 新年度-2023/24年度生産量は全体的に楽観的、各品目とも史上最高見通しとなった

USDAの今年度最初の穀物収穫予想は、天候条件にも恵まれ下表にある様にコーンは12億ト超、小麦は8億トに迫り、表にはないがコメは5億ト超、大豆は何と4億トを軽くオーバーし其々史上最高生産見通し、その結果穀物全体で28.2億ト+大豆で合計32.3億トと新たなステージに至ったという感がある。それとは対照的に価格レベルは昨年度の暴騰が嘘のように鎮まり返りロシアのUKR侵攻以前に戻ったと言える。ただこの見通しは現状が続けばという前提で見る必要がある。

② 新年度の動向を左右する米国の作付け/収量予想/輸出見通しは昨年から大幅に改善

米国の品目別作付け動向は小麦2,018/コーン3723/大豆3541万haと前年比小麦は9%/コーン3.8%増、大豆は前年並みとなり、4月末時点の作付け進捗率も前年をいずれも上回って順調である。その結果収量は小麦45/コーン387/大豆122百万トとなりコーンは前年比約4千万ト11%増/大豆6百万ト6%増となった。輸出は主力のコーンが前年比6百万ト増の53百万トとなり大豆含めた穀物全体では136百万トと前年より約1千万ト増となり、BRA152百万トと拮抗する状況が予想される。

③ UKRの穀物生産は作付面積減少等からキビシイ状況が続き、「黒海回廊」合意延長問題も不透明

UKRの穀物生産/輸出見通しは別添「需給表」にある通り厳しい状況が続いている。両品目合計生産39/輸出27百位万トと前年比生産は▼9/輸出▼14百万トと大幅減少の見通しである。これは当然作付面積/肥料等生産資材/物流インフラ等其々の分野で困難が増していることに他ならない。「黒海回廊」は5/17にロシアが7/18までの延長に合意したと伝えられたが実態は不透明。昨年8月～今年3月末までの船積実績合計2,649万ト（コーン1,321/小麦723万トその他）。仕向地は中国が最大。

1、世界穀物需給の概要

① 生産量：	2,820百万ト（前年比3.0%	増 ↑、前月比3.1%	増 ↑）
② 消費量：	2,810百万ト（前年比1.5%	増 ↑、前月比1.7%	増 ↑）
③ 貿易量：	500百万ト（前年比3.0%	増 ↑、前月比3.8%	増 ↑）

2、小麦

① 生産量：	790百万ト（前年比0.2%	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑）
② 消費量：	792百万ト（前年比0.4%	減 ↓、前月比0.5%	減 ↓）
③ 輸出量：	210百万ト（前年比2.6%	減 ↓、前月比1.4%	減 ↓）
⑤ 在庫量：	264百万ト（前年比0.7%	減 ↓、前月比0.3%	減 ↓） / （在庫率 33%）うち中国140百万ト、占有率53%

④ 価格：\$6.47/Bu（前年\$10.97/Bu / 前月\$6.76/Bu）と前月比\$0.29 下落。

⑥ 概況：世界生産量は、昨年史上最高を記録したロシア/豪州が若干減産するもARGの回復インド/EUの増産から全体的には前年比更に増加し市場最高の見通し。消費量は飼料用需要減から微減するが輸出量は2億ト台を維持する見通し。

3、とうもろこし

① 生産量：	1,220百万ト（前年比6.0%	増 ↑、前月比6.6%	増 ↑）
② 消費量：	1,204百万ト（前年比3.7%	増 ↑、前月比4.2%	増 ↑）
③ 輸出量：	195百万ト（前年比11.3%	増 ↑、前月比12.4%	増 ↑）
④ 在庫量：	313百万ト（前年比5.2%	増 ↑、前月比5.9%	増 ↑） / （在庫率 26%）うち中国204百万ト、占有率65%
⑤ 価格：	\$6.53/Bu（前年\$7.92/Bu / 前月\$6.44/Bu）	と前月比\$0.09 上昇。	

⑥ 概況：世界生産量は、昨年早魃で減産した米国が収穫面積/単収増で大幅増産見通しであることやARGも早魃から回復することから全体では前年比75百万ト6%増と12億トを超え市場最大となる見通し。消費量も米国/BRAで増加が見込まれることから前年比3.7%増と大幅に拡大見通し。輸出量も生産増による価格低下から11%増の195百万トと2億トに迫る見通し。

4、大豆

① 生産量：	411百万ト（前年比10.8%	増 ↑、前月比11.1%	増 ↑）
② 消費量：	386百万ト（前年比5.9%	増 ↑、前月比5.6%	増 ↑）
③ 輸出量：	172百万ト（前年比2.4%	増 ↑、前月比2.6%	増 ↑）
④ 在庫量：	123百万ト（前年比21.2%	増 ↑、前月比22.1%	増 ↑） / （在庫率 32%）うちBRA40/ARG24百万ト

⑤ 価格：\$14.69/Bu（前年\$16.56/Bu / 前月\$14.93/Bu）と前月比\$0.24 下落。

⑥ 概況：世界生産量は、米国の単収増やARGの早魃からの回復から前年比41百万ト増加し、4億トを超え数年連続史上最高を更新する見通し。消費量もARG/中国における搾油量増から6%近い増加。輸出量は4百万ト2.4%増に留まる見込み。

世界の穀物・大豆等の需給

2023年5月12日
米国農務省発表： 単位１００万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,798	3,594	513	2,804	790
	2021/22		2,738	3,528	486	2,768	760
	2022/23	4月	2,735	3,523	482	2,764	758
	2023/24	5月	2,820	3,580	500	2,810	770
小麦	2020/21		780	1,066	203	793	273
	2021/22		788	1,061	215	795	266
	2022/23	4月	789	1,061	213	796	265
	2023/24	5月	790	1,056	210	792	264
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注１	2020/21		1,504	1,827	253	1,492	335
	2021/22		1,441	1,777	215	1,452	325
	2022/23	4月	1,436	1,770	214	1,448	322
	2023/24	5月	1,510	1,834	235	1,495	339
米	2020/21		514	701	57	519	182
	2021/22		508	691	55	522	169
	2022/23	4月	509	691	56	520	171
	2023/24	5月	521	690	56	523	167
大豆	2020/21		360	460	154	361	99
	2021/22		370	469	168	368	101
	2022/23	4月	370	469	168	366	104
	2023/24	5月	411	512	172	386	125

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	4月	306.91	1,144.50	173.97	1,156.06	173.79	295.35
	5月	297.41	1,219.63	184.50	1,204.14	195.26	312.90
アメリカ	4月	34.98	348.75	1.02	303.67	46.99	34.08
	5月	35.98	387.75	0.64	314.59	53.34	56.43
アルゼンチン	4月	1.49	37.00	0.01	12.00	25.00	1.49
	5月	1.50	54.00	0.01	13.50	40.50	1.51
ブラジル	4月	3.97	125.00	1.30	73.00	50.00	7.27
	5月	7.97	129.00	1.20	76.50	55.00	6.67
EU	4月	9.93	52.97	24.50	78.10	2.20	7.10
	5月	7.48	64.30	20.00	79.50	5.00	7.28
日本	4月	1.39	0.01	15.00	15.00	0.00	1.40
	5月	1.40	0.01	15.50	15.50	0.00	1.42
中国	4月	209.14	277.20	18.00	297.00	0.02	207.32
	5月	205.32	280.00	23.00	304.00	0.02	204.30
ロシア	4月	0.93	15.83	0.05	11.70	4.10	1.01
	5月	1.01	16.30	0.05	11.90	4.20	1.26
ウクライナ	4月	6.09	27.00	0.00	6.20	25.50	1.39
	5月	1.39	22.00	0.00	5.50	16.50	1.39

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	4月	99.73	369.64	164.76	365.83	168.00	100.29
	5月	101.04	410.59	169.77	386.49	172.41	122.50
アメリカ	4月	7.47	116.38	0.41	63.69	54.84	5.72
	5月	5.86	122.74	0.54	66.29	53.75	9.11
アルゼンチン	4月	23.90	27.00	8.30	37.70	3.40	18.10
	5月	18.15	48.00	5.70	43.20	4.60	24.05
ブラジル	4月	27.60	154.00	0.75	56.90	92.70	32.75
	5月	33.10	163.00	0.45	59.70	96.50	40.35
中国	4月	31.40	20.28	96.00	112.30	0.10	35.28
	5月	35.80	20.50	100.00	118.00	0.10	38.20
EU	4月	1.62	2.44	13.90	16.23	0.25	1.48
	5月	1.48	3.10	14.00	16.74	0.30	1.54

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	4月	272.09	789.02	206.30	796.06	212.71	265.05
	5月	266.28	789.76	207.54	791.70	209.72	264.34
アメリカ	4月	19.01	44.90	3.40	29.94	21.09	16.28
	5月	16.28	45.16	3.67	30.26	19.73	15.12
アルゼンチン	4月	1.93	12.55	0.01	6.45	5.50	2.53
	5月	2.53	19.50	0.01	6.50	13.50	2.04
オーストラリア	4月	3.43	39.00	0.20	8.50	28.50	5.63
	5月	3.15	29.00	0.20	8.00	21.00	3.35
カナダ	4月	3.66	33.82	0.60	9.55	25.00	3.54
	5月	2.54	37.00	0.60	9.60	27.50	3.04
EU	4月	13.32	134.34	10.50	111.00	35.00	12.16
	5月	16.16	139.00	7.00	109.50	38.00	14.66
中国	4月	136.76	137.72	12.00	146.00	0.90	139.58
	5月	139.08	140.00	10.50	149.00	0.90	139.68
インド	4月	19.50	104.00	0.10	107.75	5.35	10.50
	5月	9.50	110.00	0.10	107.60	0.50	11.50
ロシア	4月	11.09	92.00	0.30	44.00	45.00	14.39
	5月	17.64	81.50	0.30	41.00	45.50	12.94
ウクライナ	4月	5.77	21.00	0.08	9.00	14.50	3.34
	5月	2.24	16.50	0.06	7.10	10.00	1.70

脚注１：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約８０％がとうもろこしである。
脚注２：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：９月～８月。

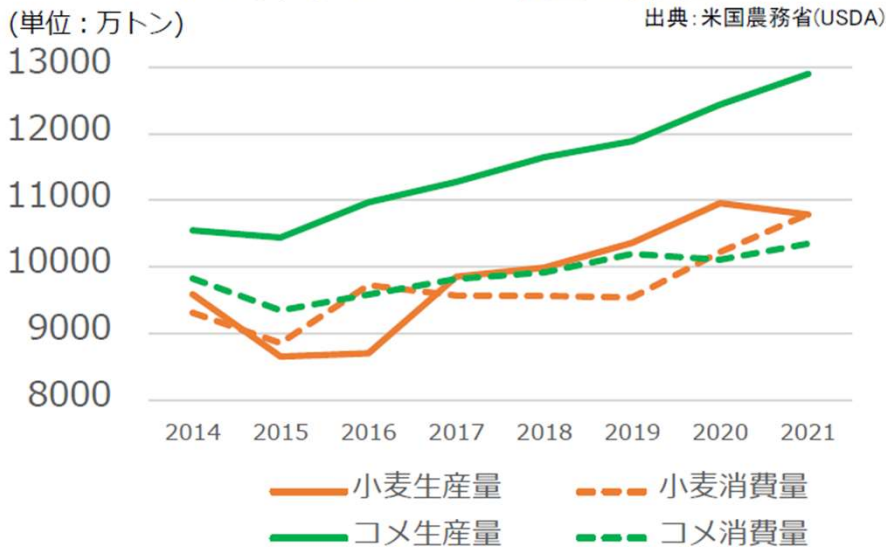
世界主要国の農業と穀物需給の行方…インド(2)

① インドは1947年の独立以降長期にわたり穀物輸入大国であったが、1960年代の「緑の革命」による高収量品種の普及/化学肥料・農薬の投入/そして灌漑施設導入等により1970年代後半には穀物自給をほぼ達成、1990年代後半にはコメを中心に余剰分の輸出を行うまでになった。今年度の世界のコメ輸出市場規模約55百万トンの中でインドは約22百万トン(40%)を占め、タイ8百万トン/ベトナム7百万トン等を大きく上回りその影響力は大きい。一方、小麦は基本的にはほぼ自給出来ているが、不足時には輸入し余剰時は輸出する(±上下約5百万トン規模)ということを繰り返している。

② 先月号でも触れた通り、コメと小麦はインド農業生産の基軸であるがその生産地帯は下記の地図に示した通り、小麦は降雨量1,000mm程度で比較的乾燥地帯のインド北西部、コメは降雨量2,000mm程度以上で南西モンスーンの影響の強い東部から南部にかけて位置している。インドは、中国同様古くから耕作可能地は利用されており更なる耕作地拡大は見込めず、生産量増加は単収増大が不可欠である。下表に示す通りインドの小麦/米の生産量は2014⇒2021年比較で小麦は0.96⇒1.1億トン、コメは精米ベースで1.05⇒1.3億トンと其々115%、124%と拡大しているが穀物の平均単収は伸びたとはいえ2021年時点でまだ3.2トン/haと世界平均4.2トン/haやブラジル5.3トン/ha/日本6.1トン/ha/米国8.3トン/ha等に比べまだまだ低いのが現状である。この背景は、「緑の革命」で生産性は上がったとはいえ①平均農地面積は1.08ha、0.4ha以下の農家が約7割という構造的零細性。②同時にこの農家の零細性と貧困の為、個別経営の近代化/資本投資が進まず国の農業近代化施策も不十分。③また旱魃や洪水の多発と気候的条件が極めて厳しい、等が挙げられる。

③ 小麦と米の生産は下記「クロップカレンダー」に示す通り、小麦の播種は10-12月に行い、冬を越し収穫は翌年3-6月。一方コメは雨季に育つかリフ(Karif)米と乾季に育つラビ(Rabi)米の2種類があるが、カリフ米の播種は6-8月/収穫は10-翌1月、ラビ米の播種は12-1月/収穫は8-9月とサイクルが違っている。主に北部ではカリフ米と小麦の「二毛作」、南部ではカリフ米とラビ米の「二期作」が行われているのが特徴である。これらは全て気候的条件によって定まってくる。インド政府は食料需給予測について「2020年のインドビジョン」の中で、インドは世界の主要穀物輸出国になるという極めて楽観的な見通しを示していたが、現実的には国民所得向上による国内食料需要や飼料穀物需要増などによりそれは実現できていない。インドは急速な経済発展、食生活の変化の中で食肉需要や食用油需要増加も見込まれ、コメを除く飼料穀物・油糧種子・小麦の輸入依存が増加する可能性が高いと思われる。(続く)

インドの小麦及びコメの生産量と消費量の変化



クロップカレンダー 出典: FAO

